

二〇〇八年一月

飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報
(三)

奈良文化財研究所



18

(2 : 3)



14



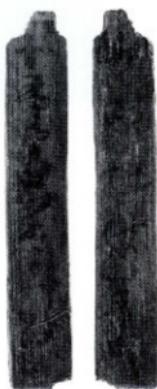
10



20



7



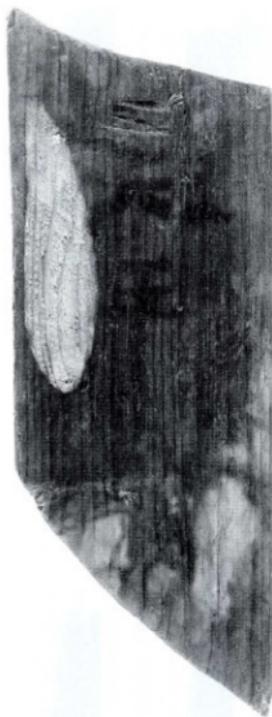
13



19



16
(2 : 3)



21

6



4

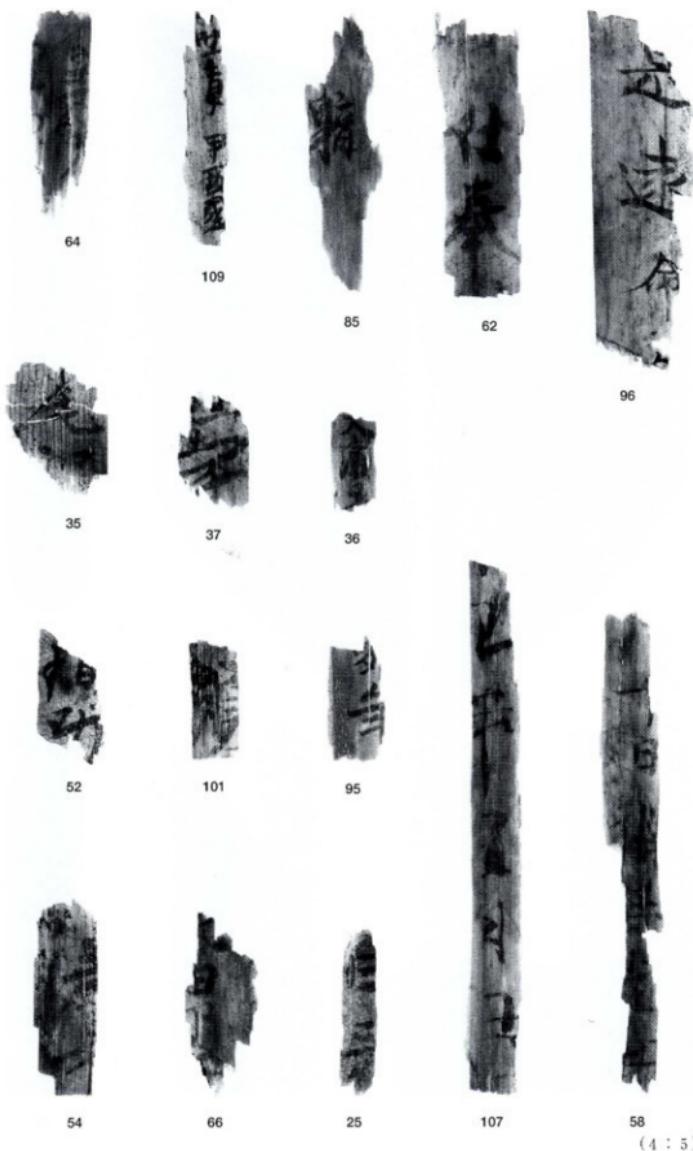


2



17

(2 : 3)



この概報には、さきに刊行した『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報(二十一)』(一〇〇七年。以下『木簡概報(二十一)』と略す)以後、二〇〇六度に都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)の行なった発掘調査で出土した木簡のうち、主要なものを収録する。木簡が出土したのは、飛鳥藤原第一四五次調査(石神遺跡第一九次調査)である。これは『奈良文化財研究所紀要二〇〇八』(一〇〇八年。以下『紀要二〇〇八』と略す)で出土木簡の一部を報告している。

また、二〇〇五度以前に実施した調査のうち、②飛鳥藤原第一一二次調査(石神遺跡第一五次調査、一〇〇二年度)で多数の削屑木簡が出土したが、その整理作業が一段落したので、それらについても報告する。また、③小山廃寺跡東南部の調査(一九八七年度)に關しても、これまで未報告であったので、あわせて報告したい。

この他、折りに触れて実施してきた木簡の再調査を通じて、秋文に一部訂正する箇所が生じているので、こちらで把握しているものと列挙する。ただし、藤原京木簡に関しては、本年度に木簡図録『飛鳥藤原京木簡二・藤原京木簡一』(奈良文化財研究所史料第八十二冊、一〇〇九年三月刊行予定)で収載可能な木簡はすべて取り上げるので、ここでは省略する。また、既刊の『木簡概報』で秋文訂正したものも省略する。木簡の再調査は今後も継続する予定であり、機会をみて報告していきたい。

第一四五次調査(石神遺跡第一九次調査)

一、木簡の出土地点と状況

5 AMD区 一〇〇六年一〇月～一〇〇七年五月

一九八一年度より実施している石神遺跡の継続調査の一九回目。調査地は石神遺跡の中心をなす建物群の北外側にある。第一五次調査以来、中心建物群北側の土地利用と近隣に想定される阿倍山田道の確認を主眼に調査を進めており、その過程で七世紀後半頃の木簡が多数出土している。今回の調査区は、第一八次調査区のすぐ北側で、発掘面積は八七〇m²(図1)。検出した主な遺構は、阿倍山田道、溝、沼沢地、壠状施設、杭列、礫集中である。これらは大きく五時期に分かれる。ここではI～V期に分けて記述する。

〔I期〕七世紀中葉以前

調査区に谷が入り、西側には沼沢地SX四〇五〇が広がる。沼沢地の内部には壠状施設SX四二六二が設置されている。東側の微高地には、北に向かって西に振る斜行溝SD四二六〇が掘削される。幅二・一五二・五m、深さ〇・五mで、断面は逆台形を呈する。

〔II期〕七世紀中葉～七世紀後半

沼沢地SX四〇五〇と斜行溝SD四二六〇を埋め、阿倍山田道SF二六〇七をつくる。SX四〇五〇の堆積土内には杭列SX四二六三～四二六五が打ち込まれ、北で西に振る南北二二m、東西二〇m

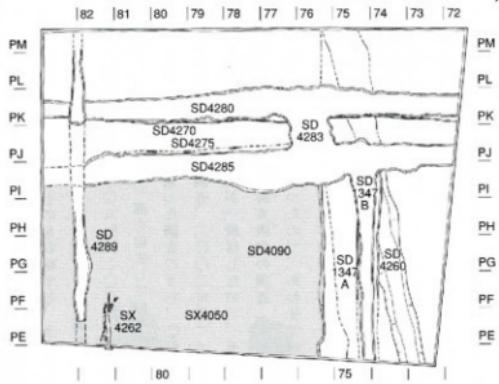


図1 第145次調査遺構図 1:300

以上の方形区画が設けられている。杭列を境にSX四〇五〇の埋立土の状況が異なることから、杭列は埋立時の土留めの役割があったと考えられる。SD四二六〇からSD四二九〇の埋立土とPM層との間にPM層が多数出土しており、阿倍山田道の建設はこの頃と判断できる。道は盛土工法で構築され、基礎部分には敷藁工法が用いられた。

こうして阿倍山田道の路面を盛土した後、その南側溝SD四二七〇が掘削される。SD四一七〇は側面と底で石の抜けた痕跡が認められ、石組溝であったと推定できる。幅一・三・八m、深さ〇・二五・四mである。またSD四二七〇の南側には、第一五次調査区から続く南北大溝SD四〇九〇が屈曲して西に流れた。これまでSD四〇九〇の掘削時期は七世紀後半としてきたが、阿倍山田道の盛土がSD四〇九〇北岸となる堤の役割を果たしているので、両者は一体的に整備したと判断できる。すなわち、SD四〇九〇の掘削は7世紀中葉にまで遡る可能性が新たにできた。SD四〇九〇は幅二二m以上、深さ〇・五mで、東岸は直線状をなす。なお、阿倍山田道とSD四〇九〇との間を遮蔽する施設は確認していない。この他、北で西に振る斜行溝SD四二七一が存在する。沼沢地S四〇五〇を埋めた土を振り込み、阿倍山田道の盛土によって覆われた溝で、II期造成に間わる一時期な排水溝と考えられる。

〔Ⅲ期〕七世紀後半
阿倍山田道南側溝SD四二七〇と南北大溝SD四〇九〇を埋め、

東西溝SD四二七五・南北溝SD一三四七Aを設けてT字状に接続させる。SD四二七五は阿倍山田道南側溝で、SD四二七〇を南に三・三・五m移動させたものである。幅一・五・二・二m、深さ〇・三mである。一方、SD一三四七Aは石神遺跡全体を南北に貫く基幹排水路で、幅一・八・二m、深さ〇・二m。第一六・一八次調査では、SD一三四七Aの下層で南北溝SD四一二七を検出していが、本調査区ではその存在を確認できなかった。

〔IV期〕七世紀末

阿倍山田道南側溝SD四二七五と南北溝SD一三四七Aを埋めた後、東西溝SD四二八〇・四二八五、南北溝SD一三四七Bを掘つて干状に接続させる。

SD四二八〇・四二八五は阿倍山田道南側溝である。SD四二八

五はSD四二七五をやや南にずらしたもので、SD一三四七Bとの合流点以東では幅一・三・一・七m、深さ〇・一・〇・一m、合流部以西では幅二・三・三・三m、深さ〇・二mである。SD四二八〇はSD四二八五の北約四・六mに位置し、幅一・三・二・五m、深さ〇・一m。SD四二八〇とSD四二八五の掘削の前後関係は不明であるが、同じ灰色粗砂で埋まっていること、両溝をつなぐSD四二八三の存在からみて、少なくとも最終段階では併存していた。北側の山田道第二・三次調査では、この時期の阿倍山田道北側溝とみられる東西溝SD二五四〇を検出しており、SD四二八〇を南側

溝とする、路幅約一八m、溝心々間距離で二二・二mとなる。

一方、SD一三四七BはSD一三四七Aを埋めた後、ほぼ同じ位直に掘り直した溝である。幅一・二m前後、深さ〇・二m。

〔V期〕奈良時代

南北溝SD四二八九、礫敷SX四二五五・四二五九などがある。

SD四二八九は調査区西側に位置し、幅〇・五・一・三m、深さ〇・二・〇・四mである。阿倍山田道を横断しており、道路が機能低下していることを推測させる。SX四二五五は第一五次調査区から

続く礫敷で、径五cm前後の小礫が中心である。礫敷SX四二五九は第一八次調査区から続く礫敷で、逆L字状に東に折れる。人頭大の大礫が集中し、SX四二五五の上を覆う。礫に接して瓦器が出土していることから、平安時代以降の遺構と考えられる。

〔木簡〕木簡は、①沼沢地SX四〇〇五〇埋立土から一点、②斜行溝

SD四二六〇から五点、③阿倍山田道SF二六〇七造成土から二点、④南北大溝SD四〇九〇から二点（うち削屑四点）、⑤阿倍山田道南側溝SD四二七五から一点、⑥SD四二七五埋立てに伴う周辺整地土である暗灰褐色粘質土から一点、⑦阿倍山田道南側溝SD四二八〇から三点、⑧阿倍山田道南側溝SD四二八五と南北溝SD四二八三の存在からみて、少なくとも最終段階では併存していた。南北溝SD四二八九から四点、⑩現代暗渠から一点、計三三点（うち削屑四点）が出土した。

◎石神遺跡北方域の遺構変遷について

石神遺跡第一五〇・一九次調査を通じて、石神遺跡の北限施設から阿倍山田道にいたる南北一〇〇mほどの空間を発掘したことになる。これまで各調査ごとに遺構の変遷過程について報告したが、調査を繰り返す過程で、一部所見が変更された部分もある。ここに改めて整理を行なつてみたい。ただし石神遺跡の発掘調査は今後も継続するため、今回の整理はあくまでも現時点における所見として理解されたい。なお、石神遺跡第一五〇・一八次調査では、石神遺跡中心部の調査所見にもとづくA～C期という時期区分を用いて遺構変遷をたどってきたが、第一九次調査ではI～V期という新たな区分を用いており、それに従つて叙述する（図2、表1）。

【Ⅰ期】七世紀中葉～後半

第一五〇・一九次調査区内はもとと谷が入つた起伏のある地形で、南北方向に向かう流路が調査区の大部分を覆い、沼沢地S X四〇五〇が形成されていた。沼沢地の堆積は古墳時代中・後期にかけて進行しており、堰状施設も形成されていた。第一八・一九次調査区の東側には微高地が形成されており、方位が振れる斜行溝S D四二六〇や石組列S X四二三五が設けられており、東方には何らかの施設が存在したとみられる。山田道第二次調査などでは、七世紀代の方位が振れる掘立柱建物や溝を多数検出しており、この時期の遺構となる可能性が高い。

【Ⅱ期】七世紀中葉～後半

I期の沼沢地S X四〇五〇および斜行溝S D四二六〇は埋め立てられ、周辺一帯の整地がなされた後、阿倍山田道が構築される。その時期については、斜行溝S D四二六〇の埋立土から飛鳥I・新段階の土器がまとまって出土したことから、七世紀中頃と推定できる。

沼沢地埋め立ての際には、杭列で方形区画をつくり、土留めを行なつて、山田道第二・三次調査では石組暗渠を検出しているが、この一連の整地に伴う可能性が高く、雷丘東方の広範囲にわたる造成であったとみられる。整地後、敷策工法を用いた盛土工法によつて阿倍山田道の構築がなされ、南側溝として東西溝S D四二七〇が掘削される。

阿倍山田道の南方では、逆し字の大溝S D四〇八九・四〇九〇が掘削された。東西溝S D四〇八九として東流した後、南北溝S D四〇九〇となつて約九〇m北流し、再度向きを変えて西流した大溝である。S D四〇九〇の東岸は直線的であるが、西岸は北に向かって徐々に広がり、北岸付近では幅二二m以上も存在する。S D四〇九〇の両岸には土手状の施設を設け、水流を制御していた。第一六次調査区では、S D四〇九〇の西隣に円形土坑SK四一一三が存在しており、S D四〇九〇の西岸と一体化していた時期もある。

ところで、大溝S D四〇八九・四〇九〇の掘削時期については、

S K四〇六四とS D四〇八九が重複し、S D四〇八九の方が新しいことから、七世紀後半と判断してきた。ところが、第一九次調査において、S D四〇九〇が阿倍山田道の造成と一緒に作業で掘削されたという所見を得た結果、S D四〇八九に關しても七世紀中葉に掘削された可能性が高まってきた。この二つの調査所見は矛盾するが、土坑S K四〇六四との重複関係は、S D四〇八九が掘り直されたことによると考えれば、この問題は解決できる。第一五次調査ではS D四〇八九・四〇九〇に先立つ整地土を上下二層にわかつて確認しており、上層整地土に伴う土坑としてS K四〇六四の他に、S K四〇六〇・四〇六五・四〇六六・四〇六九も検出している。もしS D四〇八九・四〇九〇の掘り直しが認められるすれば、これらの上層整地土と土坑群は、改修に関わるものと解釈することが可能となる。ただし大溝出土の紀年銘木簡をみると、天智四年（六六五）の年紀をもつ木簡が一点含まれているものの、他は天武七年（六七八）～持統六年（六九二）に分布することから、掘削が本当に七世紀中葉に遡るのか、慎重に判断を下す必要がある。

一方、大溝の西側には、小規模な二絆の逆上字溝（S D四〇六八・四〇七三、S D四〇六七・四一五）が設けられており、その西方に展開する施設を回繞していた可能性がある。逆に東側の微高地においても、第一七次調査区で南北掘立塀S A四一六〇を検出しておらず、東方に施設群が存在していたことを予測させる。

〔三期〕七世紀後半

逆上字の大溝S D四〇八九・四〇九〇などは埋め立てられ、整地もなされる。阿倍山田道の南側溝はS D四二七〇からS D四二七五に造り替えられ、道幅は広げられたと推定できる。大溝の埋め立てに際しては、一時的な南北排水路S D四一二一や、廐棄土坑S K四〇九六・四〇九七・四一二二などが設けられている。S D四一二一は木屑を多く含む溝で、その周辺にも木屑層が広範に広がる。

この時期、石神遺跡中心施設群から続く南北基幹排水路S D一三四七Aが掘削され、阿倍山田道の南側溝S D四二七五に注ぎ込んだ。S D一三四四七Aはすぐ東側のS D一四七六とセットになって南北道路の両側溝を形成するとみていたが、第一七次調査ではS D一四七六は確認できず、南北道路の存在については再検討の余地が生じている。ただし両側溝こそ伴わないものの、石神遺跡を通つて飛鳥寺西北隅にいたる通路の役割を果たしていた可能性は残る。

また、第一五次調査区では、掘立柱建物S B四〇七〇、石組井戸S E四〇八〇、石敷S X四〇八一が併存しており、調査区の西側に施設が展開していたことを示している。第一六次調査区にも、S D一三四四七Aの西側に石敷S X四一二四が存在し、これらと一連の可能性がある。

さて、南北基幹排水路S D一三四四七Aからは、天武四年（六七八）、同七十年、朱鳥元年（六八六）の紀年銘木簡が出土している。

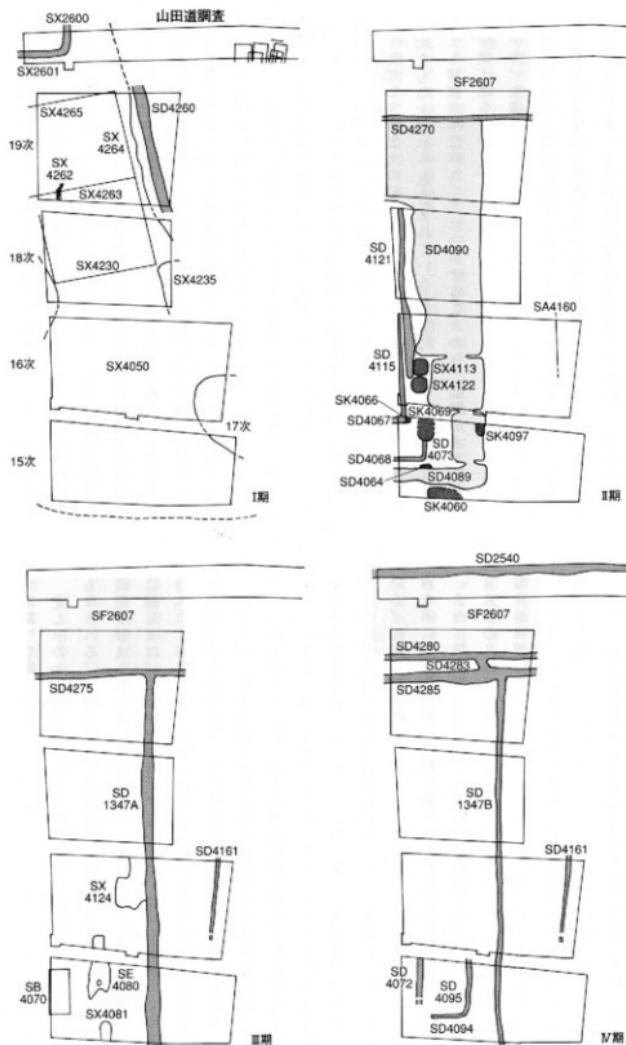


図2 石神遺跡北方城の遺構変遷図

表1 石神木簡の出土遺構と年代観

時期	木簡出土遺構	紀年銘木簡	出土戸数	出土枚数	木簡	削屑	計	木簡出典
I 期	SK4050				1	0	1	
II 期移行期	SD4260			19次	5	0	5	◎21~4
行差	SF2607造成土				1	0	1	◎25, 6
	II 期上層敷地土				6	0	6	◎1~5
	SK4060		1		12	15	27	◎26~9
	SK4064 天武7年(678)	1			14	108	122	◎10~12, ◎223~24
	SK4066				19	203	222	◎13~15, ◎25~31
	SK4069		2		26	471	497	◎16~31, ◎32~57
	SD4089 天智4年(665)、天武7年(678)	9			114	579	693	◎32~69, 106~111, ◎58~87
II 期				15次				
		天武13年(684)	3	3	63	144	207	◎70~89, 112~116, ◎88~94
	SD4090 持統2年(688)、持統6年(692)3点		5	5	16次	63	48	111 ◎76~83, 87~111
		天武8年(679)、持統4年(690)	1		18次	37	1	38 ◎1~22
					19次	9	4	13 ◎27~11
	SX4113		1		16次	9	5	14 ◎84~86
	SK4096 天武14年(685)、持統4年(690)	2	2	15次	18	8	26	◎90~100
II 期～III 期移行期	SK4097 天武12年(683)				19	208	227	◎10~105, ◎95~106
	SD4121 天武8年(679)	2		16次	72	313	385	◎112~136
	木屑層			18次	7	0	7	◎23~25
	SX4122 天武11年(682)	3	1	16次	40	75	115	◎137~150
	III 期造成棲地上				19次	19	32	51 ◎151~159
		朱鳥元年(686)	3	1	16次	4	1	5 ◎117
		朱鳥元年(686)	3	1	16次	17	0	17 ◎160~168
III 期		天武10年(681)2点	11	1	15次	63	259	322 ◎18~142, 144~145, ◎107~119
	SD1347A 天武4年(675)、天武7年(678)、天武9年(680)		4		16次	50	30	80 ◎169~190
		天武8年(679)、朱鳥元年(686)	3		18次	26	32	58 ◎26~41
	SD4275 緩灰褐色粘質土		1		19次	1	0	1 ◎12
	SE4080				1	0	1	◎13
	SB4070				15次	0	11	11
					1	2	2	
IV 期	SD1347B		1		15次	2	19	21 ◎143
					18次	4	0	4 ◎42
	SD1347B+SD4285合流点				0	0	0	
	SD4280 天武10年(681)	1			19次	1	0	1 ◎17
	SD4094				3	0	3	◎14~16
	SD4095 *持統3年(689)				2	0	2	
	SD4072 蒼灰色土		1		15次	5	0	5 ◎152~154
					9	2	11	◎146~151
V 期、その他	SD1289				19次	1	0	1
	SD4126				19次	4	0	4
	SK4063		1		16次	2	0	2
	SD4071				1	1	2	◎165
	SK4061				15次	1	0	1 ◎156
	遺物包含層		2		1	0	1	
					9	1	10	◎157~162
	現代隙塗			116次	7	0	7	◎191~193
	第15次隙塗区埋戻土				18次	2	0	2 ◎43, 44
	第16次隙塗区埋戻土				19次	1	0	1
	遺構不明				17次	1	0	1 ◎1
					15次	2	0	2
					18次	0	2	2
					18次	1	0	1
合計				59	16	775	2574	3349

【備考】1)木簡山標記の○の数字は「飛鳥・藤原宮跡発掘調査出土木簡概況」の号数を示す。

2)紀年銘木簡は干支を元号および西暦に置き換えて示した。SD4095の*は内容からの判断による。

【内訳】15次調査:2422点（うち削屑2034点）、16次調査:782点（うち削屑503点）、17次調査:3点

18次調査:110点（うち削屑33点）、19次調査:32点（うち削屑4点）。

る。サト表記についても、天武朝以前に一般的な「五十戸」表記のものが大半を占め、持統朝以後に一般化する「里」表記のものは一点にとどまる。II期の大溝SD四〇八九・四〇九〇出土の木簡と比べて、むしろSD一三四七Aの方が若干古くなっている。SD四〇八九・四〇九〇→SD一三四七Aという順序で溝が掘削されたことはほぼ間違いないが、木簡の年代に微妙な差異が生じている理由についてはさらに検討を要する。

〔IV期〕 七世紀末

阿倍山田道南側溝SD四二七五はSD四二八〇・四二八五に造り替えられ、南北基幹排水路もSD一三四七Bに改修される。SD四二八〇とSD四二八五の掘削の前後関係は不明であるが、最終的に併存していた。SD一三四七Bに伴う遺構として、石敷SX四〇九八を検出しているが、観して遺構は希薄である。ただし、III期とした掘立柱建物SB四〇七〇、石組井戸SE四〇八〇、石敷SX四〇八一・四二一四がIV期の遺構となる可能性も残る。

この他、第一五次調査区の逆L字の大溝と重複する位置には、小規模な浅い溝SD四〇九四・四〇九五が流れるが、軟弱な低位部に自然に形成された溝、もしくは一時的な排水溝である。また第一五次調査区の西側には、掘立柱建物SB四〇七〇より新しい南北溝SD四〇七二が存在しており、この時期に属する可能性がある。

〔V期〕 奈良時代

阿倍山田道南側溝SD四二八〇・四二八五、南北基幹排水路SD一三四七Bが灰色粗砂によって自然埋没した後、阿倍山田道は機能低下する。当該期にはSD一三四七Bを覆う石敷SX四二五五はあるが、建物などの遺構は希薄である。また、この石敷よりも上層では、素掘小溝や砾集部を検出するにとどまり、基本的に農地化されたことを示す。第一次調査では、水田耕作時の排水用の暗渠と推定される東西溝SD四一二六を検出している。

〔石神遺跡中心施設群との対応関係〕

以上、石神遺跡北方城における時期変遷を整理した。これまで石神遺跡中心施設群では、A期（七世紀前半～中葉）、B期（七世紀後半）、C期（藤原宮期）という時期区分を採用してきた。上記I～V期との対応関係をみておきたい。

中心施設群と北方城で一連の遺構として存在するのが、南北基幹排水路SD一三四七A・Bである。この溝は中心施設群ではC期に属すので、北方城のIII・IV期をそれにあてる事ができる。

つぎにII期について。大溝SD四〇八九・四〇九〇はこれまでB期としてきた。しかし第一九次調査成果によれば、大溝の掘削は七世紀中葉に遡る。中心施設群におけるA期は、三期に細分できるが、最も新しいA3期が齐明天朝に該当するので、大溝の掘削はそれよりも古くなる。大溝の掘削がA1期もしくはA2期となる可能性が新

たにでできた。Ⅰ期については、中心施設群の下層で、斜行する建物・堀・溝・暗渠などを検出しており、A期以前の遺構と概ね重なると推定できる。V期はC期以降と基本的に対応するであろう。

現在の所見をもとに、石神遺跡北方城の遺構変遷をたどつたが、出土木簡の示す年代觀との微妙なずれがあるなど、問題点も多く残されている。周辺地域の発掘調査を通じて、解決する必要がある。

以上、詳細は「紀要一〇〇三～一〇〇八」を参照されたい。

小山廃寺跡東南部の調査

5BKI区 一九八七年八月～九月

小山廃寺跡は明日香村小山字キテラに位置し、字名から紀寺跡とされているが、確証は得られていない。寺城は左京八条二坊全城の四町を占める。今回の調査は、水田改良工事に伴う事前調査として、寺域の東南隅で実施した。発掘面積は四七〇m²。検出した主な遺構は、大小一六基の土坑である(図3)。

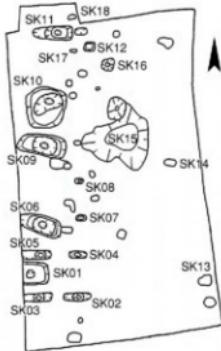


図3 小山廃寺跡調査遺構図 1:400

遺物を多く含む。上層は炭化物や瓦を含む暗褐色粘土の埋立土である。多くの土坑から、炉床・輪羽口・埴輪・湯口・バリの屑などが出土している。調査区の西北隅に近い土坑SK-10では、漆容器が大量に一括投棄されており、またわずかながら金箔も出土した。調査区周辺において、鍛銅工・漆工・箔工などが一体となって作業していたことがわかる。これらの土坑群は寺院造営に關わって掘削され、工房廃止後は塵芥処理用に再利用されたものである。

木簡は、SK○一から○点(うち削屑七点)、SK○六から一点、SK一から削屑三点、計一四点(うち削屑一〇点)が出土した。いずれも下層堆積層からの出土である。

詳細は「飛鳥・藤原宮発掘調査概報十八」を参照されたい。

二、凡例

の左傍に・を付し、原字を上の要領で右傍に示した。
合点。

(一) 木簡は内容により、文書、付札、その他の順に排列するのを原則とし、便宜的に通し番号を付した。

(二) 秋文の漢字は概ね現行常用漢字に改めたが、一部本字や異体字を用いた。

(三) 秋文に加えた符号は次のとおりである。

・ 本簡の表裏に文字がある場合、その区別を示す。

○ 木簡の上端もしくは下端に孔が穿たれていることを示す。

□ 欠損文字のうち字数が推定できるもの。

□□ 欠損文字のうち字数が確定できるもの。

□□□ 記載内容から、上または下に一字以上の文字を推定した

「」 異筆、追筆。

■■■ 抹消により判読が困難なもの。

△△△ 挿消部分の字画が明らかな場合に限り、原字の左傍に付した。

(×) 文字の上に重書きして原字を訂正している場合、訂正箇所

(一) 校訂註のうち本文に置き換わるべき文字を含むもの。

(二) 右以外の校訂註、および説明註。

カ 編者が加えた註で、疑問が残るもの。

マ、 文字に疑問はないが、意味が通じ難いもの。

(四) 秋文下の右行上段のアラビア数字は、木簡の長さ・幅・厚さを示す(単位はmm)。欠損・二次的整形の場合、現存部分の法量を括弧つきで示した。長さ・幅は木簡の文字の方向による。

(五) 秋文下の右行上段に現在の遺存の形態を示す型式番号を記した。

なお端とは、木簡を木目方向においていた時の上下両端をいう。

01型式 長方形の材(方頭・主頭などもこれに含める)のもの。

015型式 長方形の材の側面に孔を穿ったもの。

019型式 一端が方頭で、他端は折損・腐蝕などによって原形の失われたもの。原形は011・015・033・041・051型式のいずれかと推定される。

02型式 小型矩形のもの。

022型式 小型矩形の材の一端を主頭にしたもの。

03型式 長方形の材の両端の左右に切り込みを入れたもの。方頭・主頭など種々の作り方がある。

032型式 長方形の材の一端の左右に切り込みを入れたもの。

033型式

長方形の材の一端の左右に切り込みを入れ、他端を尖らせたもの。

039型式

長方形の材の一端の左右に切り込みがあるが、他端は折損・腐蝕などによって原形の失われたもの。原形は031・032・033・043型式のいずれかと推定される。

041型式

長方形の材の一端の左右を削り、羽子板の柄状に作ったもの。

043型式

長方形の材の一端の左右を削り、羽子板の柄状にし、左右に切り込みをもつもの。

049型式

長方形の材の一端の左右を削り、羽子板の柄状にするが、他端は折損・腐蝕などによって原形の失われたもの。

051型式

長方形の材の一端を尖らせたもの。原形は033・051型式などによつて原形の失われたもの。

069型式

長方形の材の一端を尖らせているが、他端は折損・腐蝕などを記した。

081型式

用途未詳の木製品に墨書きのあるもの。()内に製品名を記した。

091型式

用途未詳の木製品に墨書きのあるもの。折損・割裂・腐蝕その他のによつて原形の判明しないもの。

()内の番号は二次的整形の場合に推定できる原型の型式。

(六) 秋文下の右行下段に出土地点を示す小地区名(アルファベット・数字)を記した。Zは地区不明を示す。複数の地区から出土した

破片が接続したものは地区名を併記した。

(七) 秋文の出土地点下に付した()印は、口絵図版に写真を掲げた木簡を示す。例えば「()」は「図版」に対応する。

(八) 秋文下の左行に、木簡の原形を保持しない部分の形状に関する注記などを施した。その際、木簡の「上端」「下端」「左辺」「右辺」を「上」「下」「左」「右」と略記した。

(九) 地名表記を持つ木簡の一部について、「和名類聚抄」にもとづいて地名を推定した。推定地名は説明註として秋文右行に記した。なお、地名推定に際しては、池邊彌『和名類聚抄郡郷里釋名考證』(吉川弘文館、一九八一年)などを参考した。

木簡の秋文は、都城発掘調査部の渡辺見宏・馬場基・市大樹・山本崇・浅野啓介・竹本児(当時、万葉古代学研究所)が行なった。編集に際しては、酒井健治・中尾美貴子・吉水葉子の各氏の協力を得た。写真撮影は井上直夫があたり、現像・焼付は岡田愛が補佐した。図版作成には稻田登志子氏の助力を得た。

本書の編集は市大樹が担当した。

二、积文

第一四五次調查 (5 A M D 号)

道路 S E - 一六〇七造成土

弥阿 [以腰カ]
□□□□□□

108-34-5 032 PK79
左4尺。

5 弥阿 [以腰カ]
□□□□□□

6 • □天干
• 天王

229-86-12 065 PI81 *3

7 六人アニ麻呂曾四古

112-24-4 032 PP73
「□□□□」

138-21-5 031 PJ76 *2

- 1 □□女丁大人丁□取□久□ [意カ] [御カ] (355)-21-6 081 PE73 *1
上に一片カラナリ。中間に欠損。
4 □□天 (刻書)
- 2 大家臣・□首大□ (57+31)-8-3 032 PE73 *3
下に一片カラナリ。中間に欠損。
3 十五斤 (思カ)

南北溝 S D 四〇九〇

8 □百代五十代□
□步□大百代□
□□□□□

(286)-(48)-5 081 PF76 *1
上に一片カラナリ。中間に欠損。

4 □□ (右側面) (刻書)
5 天天一
6 天天九
7 天大五

46-57-35 065 PG73 *3

東西溝〇〇四一八〇

9. □□□□□□□□□□□□□□□□加尼ア加□女
 (316)・25・4 081 PK75
 上下一片分離。上下折△。

14. 辛巳年□一連
 [物カ] □ア五十戸

(115)・(48)・4 081 PF81 *2
 三片分離。上・左下二次的整形。

下折△、左割△。

10. □廿七人 沙弥六十
 [棕カ] 棕□棕□

(63)・(20)・2 081 PG75
 下折△。

15. □
 [儀カ]

(51)・(11)・3 081 FK77
 上辺外欠損。

16. □□米一斗○

(149)・43・3 019 PK82 *2
 [主分離。上折△]。

- 13 -

東西溝〇〇四一七八五と南北溝〇〇一三四五七

12. 尾□

(77)・31・6 033 PJ76
 [主]長的輪形。

東西溝〇〇四一七八五と南北溝〇〇一三四五七
 口の合流点

暗灰褐色粘質土

17. 田田塙一斗

118・23・7 031 PI74 *3

13. [山カ] □□評佐加五十戸
 十市ア田ツ六斗俵

120・19・5 032 PK74 *2
 底△・右△・底△・左△

第一二一一次調査 (5 A M D 図)

南北溝 S D 四二一八九

18 上長押釘卅隻之中打合釘一 五丈

「□□□」(削り残り)

248・36・3 032 P182 *1

〔殿力〕
□

19 □村廣人弟国 □

(124)・20・3 081 PG82 *2

24 □廣

091 RR79
091 QC81

20 正月四日志紀未成

(148)・11・2 081 PR82 *2

上折△・右下矢

土坑の K 四〇六六

25 日 三川

091 QC81 *4

21 □一□□
□三□□(枚カ)
□四枚

(177)・22・2 061 (非題) PK81 *3

□□□
〔奉カ〕

091 QC81

26 □田ト

091 QC81

現代暗渠

22 ○小柱十九

150・37・4 081 PR75
起上・右上矢

□ア
〔日カ〕

091 QC81

49 皮 □
50 [見□□]
51 [買□カ]
52 相 [功□カ]
53 □□上
54 濟
55 長
56 [接□カ]
57 [延□カ]

091 QD80	東西溝 S □ 四〇八九	091 RP75 *4
091 QC80	月十日儀手之□	091 RP75
091 QC80	□月	091 RP75
091 QD79 *4	月	091 RP75
091 QC79	[七日□カ]	091 RQ77
091 QC79 *4	□仕奉	091 RP75 *4
091 QC79	□□□賜	091 RP75
091 QD79	□□□戸[皆□カ]	091 RQ78 *4
091 QC80	□□□里[内□カ]	091 RQ80
091 QC80	・一(廢棄)	
66 [荒田ア□]		091 RP75 *4

76	75	大 <small>〔大 カ〕</small>	091 RQ80	87	86	下	自	091 RQ75 *4
74	73	天 <small>〔天 カ〕</small>	091 RQ80	87	85	守	職	091 RP75
75	74	天 <small>〔天 カ〕</small>	091 RQ76	87	84	守	德	091 RQ75
76	75	五 <small>〔五 カ〕</small>	091 RQ79	87	83	口	衣	091 RP75
75	74	五 <small>〔五 カ〕</small>	091 RQ79	87	82	千	口	丙
76	75	五 <small>〔五 カ〕</small>	091 RQ80	87	81	口	遠	091 RQ75
75	74	五 <small>〔五 カ〕</small>	091 RP75	87	80	口	道	091 RP75
76	75	五 <small>〔五 カ〕</small>	091 RP75	87	79	口	遠	091 RP75
75	74	五 <small>〔五 カ〕</small>	091 RP75	87	78	口	遠	091 RP75
76	75	五 <small>〔五 カ〕</small>	091 RP75	87	77	口	道	091 RP75
75	74	五 <small>〔五 カ〕</small>	091 RP75	87	76	口	遠	091 RP75
76	75	五 <small>〔五 カ〕</small>	091 RP75	87	75	口	遠	091 RP75
75	74	五 <small>〔五 カ〕</small>	091 RP75	87	74	口	遠	091 RP75
76	75	五 <small>〔五 カ〕</small>	091 RP75	87	73	口	遠	091 RP75
75	74	五 <small>〔五 カ〕</small>	091 RP75	87	72	口	遠	091 RP75
76	75	五 <small>〔五 カ〕</small>	091 RP75	87	71	口	男	091 RP75
75	74	五 <small>〔五 カ〕</small>	091 RP75	87	70	口	ア	091 RP75
76	75	五 <small>〔五 カ〕</small>	091 RP75	87	69	口	ア	091 RP75
75	74	五 <small>〔五 カ〕</small>	091 RP75	87	68	口	ア	091 RP75
76	75	五 <small>〔五 カ〕</small>	091 RP75	87	67	口	ア	091 RP75

南北溝 S D 四〇九〇

--

土坑 SK 四〇九七

95

091 QB75 *4

091 QC75

091 QB75

091 QB75

091 QB75

091 QC75 *4

南北溝の口一三四七A

野□

091 RR73

091 RR73 *4

091 RR73

□已年五月□□

091 RR73

□□□壮奉□□

091 RR73

□□□〔伊々〕
□□□西國

091 RR73 *4

119 [羅々]
□

091 RR73

五十戸

091 RR73

土坑の口〇一

□人□〔雀々〕

091 RR73

□屋棟□

091 RR73

120 • □可二三万匁
〔日々〕

(108)・28・2 081 G114

□賜

091 RR73

□辺辺辺辺

091 RR73

114 □辺辺辺辺

091 RR73

113 □賜

091 RR73

112 □屋棟□

091 RR73

111 □人□〔雀々〕

091 RR73

110 □

091 RR73

109 □

091 RR73

108 □

091 RR73

107 □

091 RR73

106 □

091 RR73

105 □

091 RR73

104 □

091 RR73

103 □

091 RR73

102 □

091 RR73

101 □

091 RR73

100 □

091 RR73

99 □

091 RR73

98 □

091 RR73

97 □

091 RR73

96 □

091 RR73

95 □

091 RR73

94 □

091 RR73

93 □

091 RR73

92 □

091 RR73

91 □

091 RR73

90 □

091 RR73

89 □

091 RR73

88 □

091 RR73

87 □

091 RR73

86 □

091 RR73

85 □

091 RR73

84 □

091 RR73

83 □

091 RR73

82 □

091 RR73

81 □

091 RR73

80 □

091 RR73

79 □

091 RR73

78 □

091 RR73

77 □

091 RR73

76 □

091 RR73

75 □

091 RR73

74 □

091 RR73

73 □

091 RR73

72 □

091 RR73

71 □

091 RR73

70 □

091 RR73

69 □

091 RR73

68 □

091 RR73

67 □

091 RR73

66 □

091 RR73

65 □

091 RR73

64 □

091 RR73

63 □

091 RR73

62 □

091 RR73

61 □

091 RR73

60 □

091 RR73

59 □

091 RR73

58 □

091 RR73

57 □

091 RR73

56 □

091 RR73

55 □

091 RR73

54 □

091 RR73

53 □

091 RR73

52 □

091 RR73

51 □

091 RR73

50 □

091 RR73

49 □

091 RR73

48 □

091 RR73

47 □

091 RR73

46 □

091 RR73

45 □

091 RR73

44 □

091 RR73

43 □

091 RR73

42 □

091 RR73

41 □

091 RR73

40 □

091 RR73

39 □

091 RR73

38 □

091 RR73

37 □

091 RR73

36 □

091 RR73

35 □

091 RR73

34 □

091 RR73

33 □

091 RR73

32 □

091 RR73

31 □

091 RR73

30 □

091 RR73

29 □

091 RR73

28 □

091 RR73

27 □

091 RR73

26 □

091 RR73

25 □

091 RR73

24 □

091 RR73

23 □

091 RR73

22 □

091 RR73

21 □

091 RR73

20 □

091 RR73

19 □

091 RR73

18 □

091 RR73

17 □

091 RR73

16 □

091 RR73

15 □

091 RR73

14 □

091 RR73

13 □

091 RR73

12 □

091 RR73

11 □

091 RR73

10 □

091 RR73

9 □

091 RR73

8 □

091 RR73

7 □

091 RR73

6 □

091 RR73

5 □

091 RR73

4 □

091 RR73

3 □

091 RR73

2 □

091 RR73

1 □

091 RR73

0 □

091 RR73

小山廃寺跡東南部の調査(五三二一区)

土坑〇×一

□〇里〇大營〇〇

252・(12)・2 081

123 下毛野人〇

〔神カ〕
□郡前里鮎十八斤

(105)・15・3 031

124 □定〇

091 GP13

169 〔調カ〕
□三斗

(84)・14・3 039

☆既報告訛文の変更

※数字は本簡番号、数字は所載の頁を意味する。185 〔高椅連刀自梨
〔調カ〕
□三斗

(125)・25・6 039

190 阿由一斗升
〔一カ〕

(112)・13・2 033

197 荒阿津支〇〇

(131)・(10)・2 081

199 〔具カ〕
□〇里人大伴田〇〇〇

(112)・13・2 033

藤原宮木簡一

8 〔御等前恐々謹解寵命〇

199 〔人カ〕
□〇里人大伴田〇〇〇

(131)・(10)・2 081

200 〔侯里千
〔蠍カ〕
□〇

139・23・2 031

219・24・3 011

(101)・(29)・2 081

202 魚切里人大伴〇〇〇〇〇〇

(173)・(24)・4 081

57 〔贋カ〕
□十貝

(62)・20・3 039

133 □ア臣刀良

(93)・(8)・3 081

飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報（六）

[16] 備後國□ □斗一升 146・27・4 031

[15] 大里舍作□得□
〔造カ〕

(94)・(13)・4 039

[15] 「田里田カ」
□□□□ア□麻呂御調八連

263・24・4 033

飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報（九）

[8] □□里雀ア枚男
121・27・3 031

飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報（十七）

43
・鮎川五十戸丸子ア多加
〔大カ〕
□鳥連淡佐充干食同五□□三枝ア□
〔十戸カ〕

〔五十戸真須カ〕
□□ア□
□ア白干食大野五十戸委文ア代□

(185)・(28)・5 081

飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報（十八）

1 (130)・16・3 059
1・恐々還申我主我尊御心□賜□隨カ

・可慈給其食物者皆此仰旨待侍耳

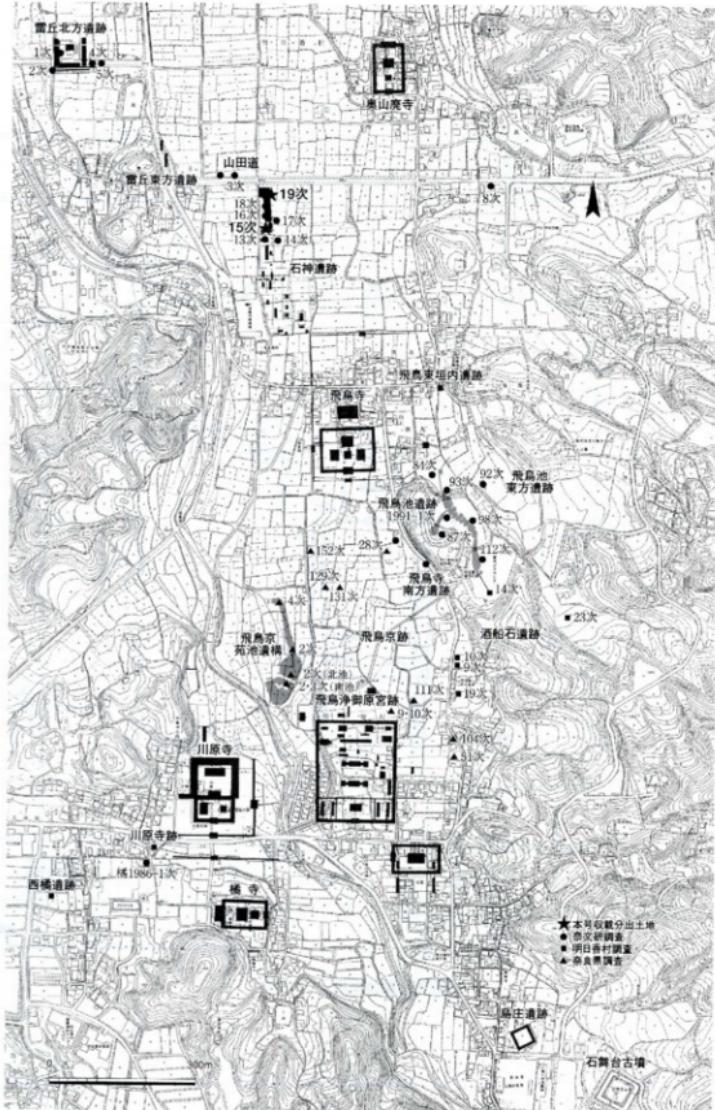
320・36・2 011

[17] 「牟邪之カ」
□□□
舍人連 日置
〔五精目〕

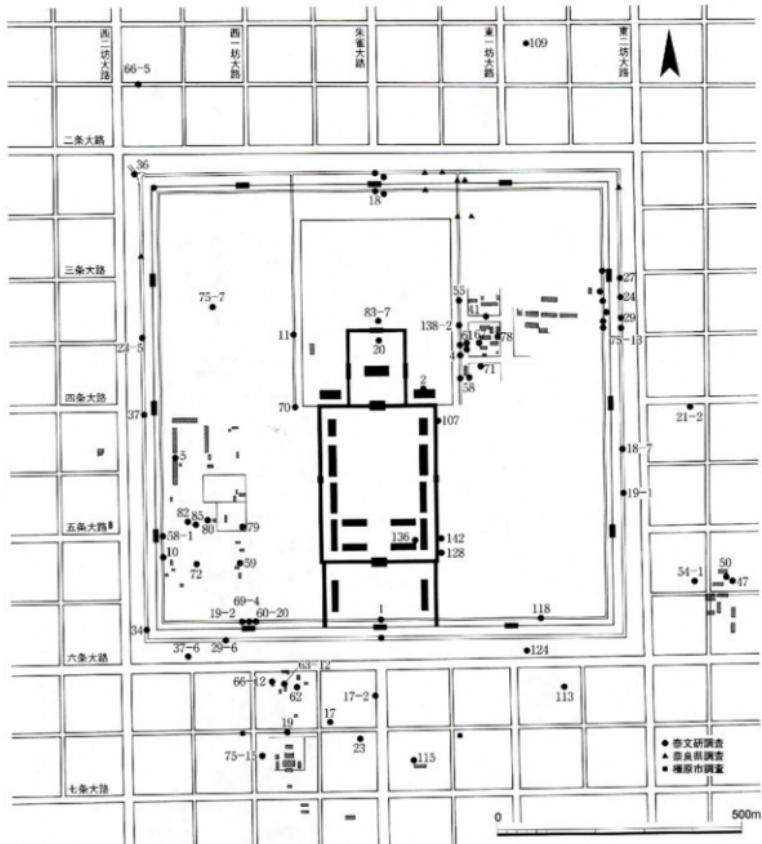
220・28・5 032

留之良奈你麻久
阿佐奈伎尔伎也
(刻書)

91・55・6 065



飛鳥地域木簡出土地 1:10000



藤原宮木筒出土地 1:10000

二〇〇八年十一月十四日 印刷
二〇〇八年十一月二十日 発行

飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報
(三)

編集・発行

独立行政法人国立文化財機構
奈良文化財研究所

〒630-1877

奈良市三条町二丁目九一
TEL ○七四一三四二三五三一
FAX ○七四一三〇六八三〇